



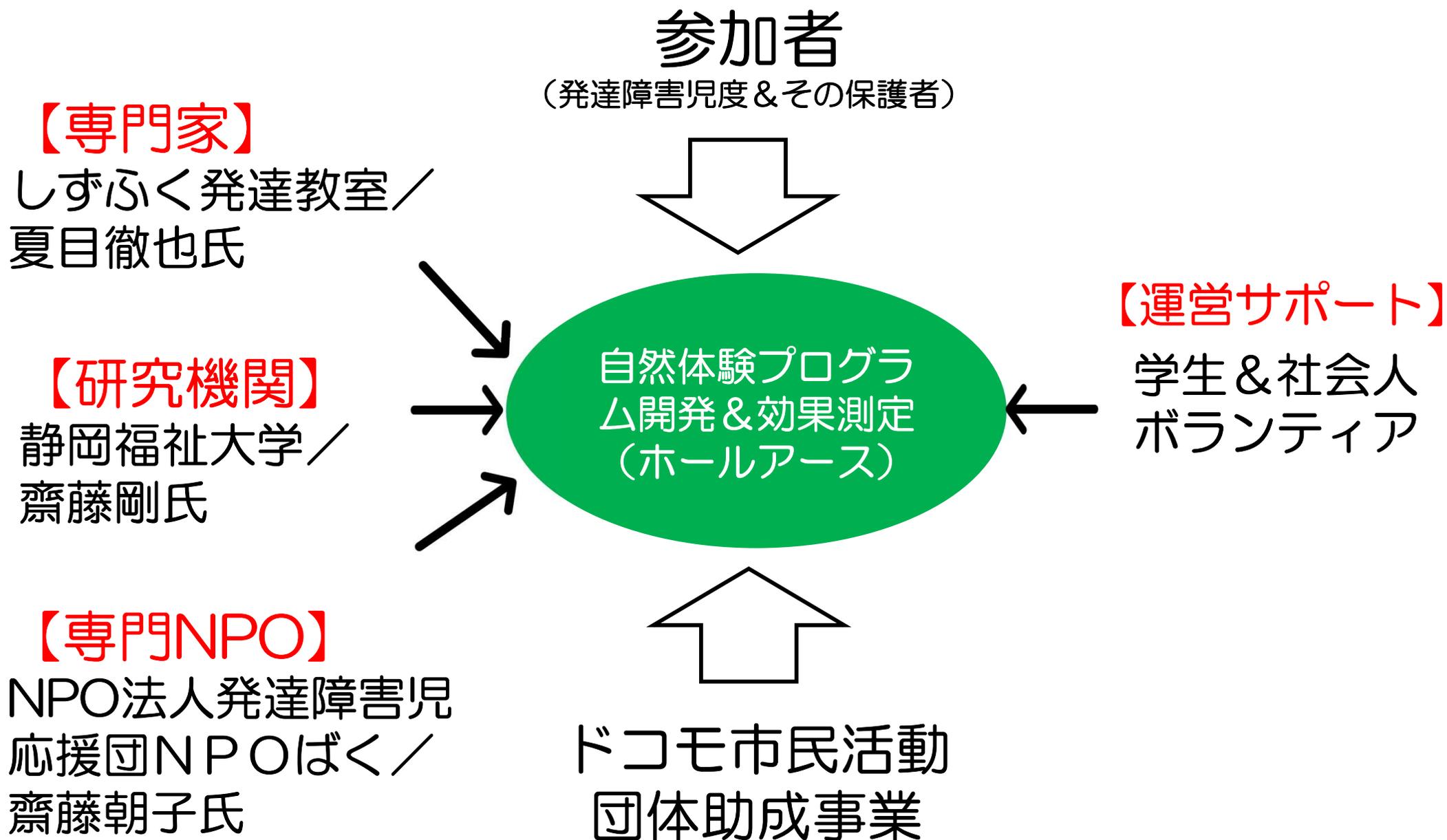
令和3年度
発達障がい児向けの
自然体験プログラム及び効果測定手法の開発
【中間報告】

2022年3月4日
NPO法人ホールアース研究所
廣瀬隼人・今永正文

①発達障がい見向けPGの開発

②ボランティア育成

③より精度の高い効果測定



10月「カヌー体験」



11月「火山洞窟探険」



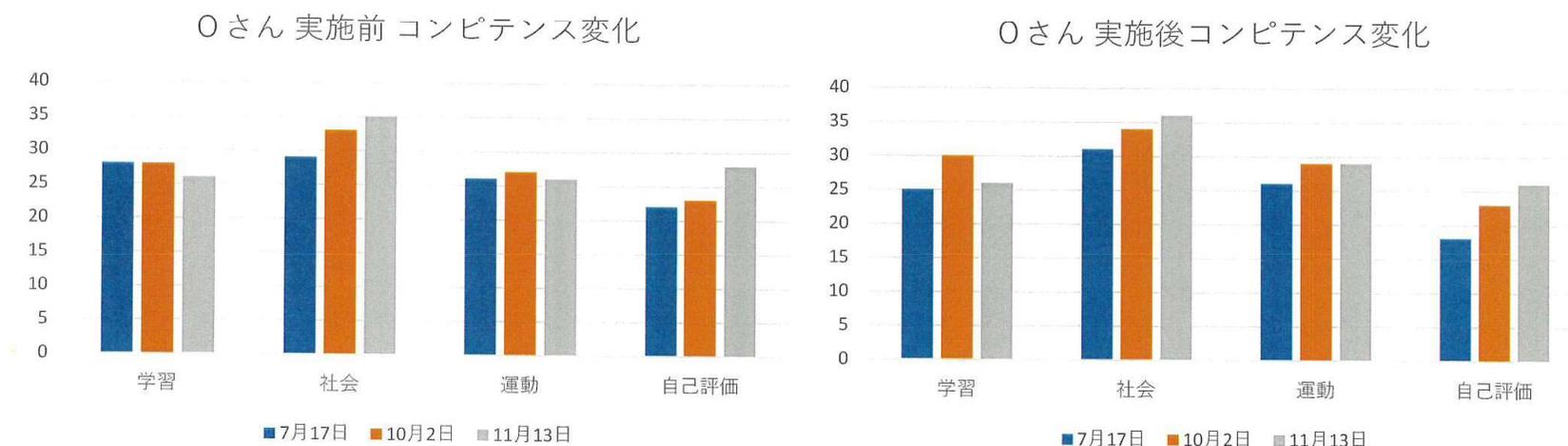
【オンライン講習会】

- ◆9月に開催、社会人・学生合わせて10名の参加。
- ◆内容：発達障がい児の基礎講義&リスクマネジメント実習

【OJT】

- ◆10月・11月にそれぞれ2名ずつの参加
- ◆3月5日は、合計4名の参加予定

③効果測定【参加者】

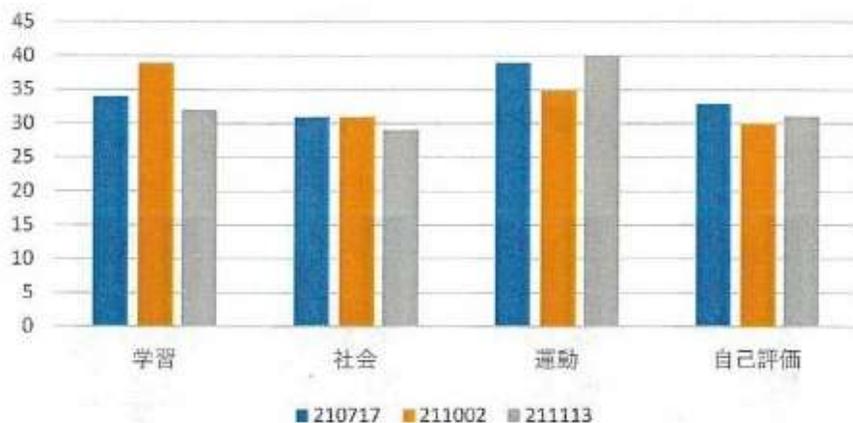


Oさんのコンピテンスの各項目（学習、社会、運動、自己評価）の変化

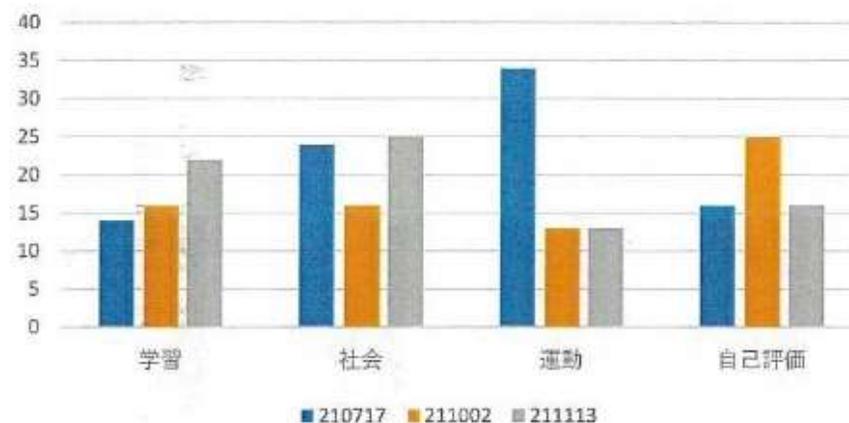
社会と自己評価に関して、回を重ねるごとに得点が増加している。対人関係や自分に対する自信が大きくなったということかもしれない。

③効果測定【対象群】

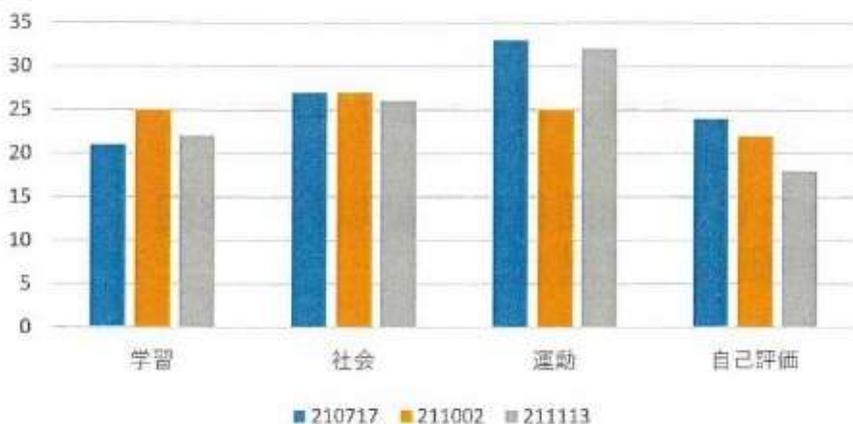
Kさん 対照群の変化



Sさん 対照群の変化



Nさん 対照群の変化



自然体験に参加しなかった対照群の人たちの各項目（学習、社会、運動、自己評価）の変化

測定する日によって得点にバラツキがあるように見える。全体として日を経るごとに増加していくような変化は見られなかった。

①自然体験プログラムの開発

→コロナ禍でも日程を調節しながら参加者を確保できた。

→分散型プログラムを実現することができた。

②ボランティア育成

→オンライン講習会（参加者は10名）の実施

→OJT（10&11月各2名、3月5日計4名参加予定）進捗

③より精度の高い効果測定

→対象群と比較したデータの分析ができた。

→プログラム後の個別変化（トイレ&人見知り克服の声）

【課題1】活動支援団体 & 組織（スポンサー等）の獲得



【原因】コロナ禍でのプログラム実施及び集客が優先で未着手



【解決策】昨期作成した関連団体リストを元に個別アプローチ開始

【課題2】宿泊型プログラム（キャンプ）の試行



【原因】宿泊未経験の参加者が想定され、不確定要素が多く未着手



【解決策】参加者への事前アンケートやサポート体制の構築

